

研究報告

受講学生へのアンケート調査から判断した国家試験対策補講 「生体材料学演習」の有効性

永松 有紀¹⁾ 永松 浩²⁾ 清水 博史¹⁾

抄録 九州歯科大学口腔機能学講座生体材料学分野では、歯学科6年次生の要望に応え、国家試験対策を主目的とした補習講義「生体材料学演習」(以下、補講)を年間8回実施している。本研究では補講の改善を目指し、平成29年度の補講後の受講学生に対するアンケート調査から、学生の受講態度と補講に求める講義内容を調べた。

全8回を総括すると対象学生の97.8%が1回以上受講した。全補講を受講した学生は22.0%、平均受講率は67.2%（標準偏差：8.6）であった。演習問題の事前解答率は回答者の65.3%（15.8）であり、補講回により大きく変動した。補講の気づきとして、回答者の95.9%（4.1）から「見落としていた点に気づいた」「間違いやすい箇所がわかった」「解答の仕方がわかった」などが挙げられた。受講の理由・目的としては、回答者の半数以上から「集中的に学修する時間を作るため」「自己学修ではまとめにくいため」などが挙げられた。以上のことから、補講に対する学生の捉え方を考察すると、個々の国家試験の準備状況に応じた自己対処を目的に、不安を振り払うために受講していることが認識された。今後の補講において、学生の心理・受講態度を踏まえたうえでの有効な学修支援となる学習目標の設定と学習プログラムの組み立ての必要性が示唆された。

キーワード 生体材料学、受講態度、講義内容、歯科医師国家試験、補講

緒 言

近年、わが国における歯科医師国家試験は、合格率が6～7割台までに低下しており、受験生の3人に1人が不合格となる現状である¹⁾。平成28年3月に出された「歯科医師国家試験制度改善検討部会報告書」では、社会情勢の変化に対応できる歯科医師の確保が謳われ、国家試験の出題内容・出題方法および合格基準等についての改善事項が取りまとめられた²⁾。新しくなったこの「平成30年度版歯科医師国家試験出題基準」の下、第111回以降の歯科医師国家試験は実施されている。これらの出題基準等の改訂も踏まえたうえで、受験生自身およびその所属機関（大学・予備校）では、国家試験突破のために緻密な分析や個人あるいはグループ学修が可能な場所の提供など、さまざまな取り組みが行われている³⁻⁸⁾。

九州歯科大学（以下、本学）では、教員のFaculty development（以後、FD）において、歯科医師国家試験

の現状把握・分析結果についての講演会や「合格率向上」を課題としたワークショップなどを行っており、教員全体の国家試験に対する認識を高め、有効な対策を検討している⁹⁾。そして、FDなどを通して現場の教員から抽出された有用な対策法を実行に移しながら、教育の質を向上させるよう大学全体で努めている。

本学口腔機能学講座生体材料学分野および総合診療学分野は、歯学科6年次生に対する講義として、後期の「総合講義Ⅱ」（単位認定あり）の1コマを担当しており、その講義のなかで、理工学的見地だけではなく臨床的見地も加えて、6年間に学修した生体材料学関連内容の総括を行っている¹⁰⁾。1コマ90分間の講義のなかで、歯科器材のすべてを網羅して詳細に解説することは困難であるため、各歯科器材とその関連事項の重要ポイントを抜粋して講義を行っている。例年、この講義は歯科医師国家試験直前の1月下旬に組み込まれているため、学生からは「数回に分けて、国家試験の合格に直結する講義をしてほしい」「もっと早い時期から項目ごとに復習をして苦手な箇所をなくしたい」などの意見が多い。したがって、著者らはこれらを考慮して、平成27年度までは正課講義の枠である1コマ90分後に、さらに1コマ90分の補習講義「生体材料学演習（以下、補講）」（単位認定な

¹⁾ 九州歯科大学口腔機能学講座生体材料学分野

²⁾ 九州歯科大学口腔機能学講座総合診療学分野

令和2年4月15日受付

令和2年7月2日受理